8月19日は『バイクの日』

利便性、安全性の追求で快適なドライビング

風を切り、颯爽と走り抜けるバイク。節電の夏、暑い都会を抜け出し、避暑地を目指すライダーも多い。そして夏が過ぎればツーリングの秋。新たなファン獲得に取り組む二輪車各社は、ベストシーズンの盛り上がりを期待する。一方、二輪車は東日本大震災後の被災地では、「生活の足」「緊急の足」として見直されている。8月19日は「バイクの日」。改めて二輪車の楽しさや利便性、安全性などについて考えながら、その価値を再発見してみよう。

ホンダが開いた大型２輪車「ＣＢ１１００」のファンイベント

バイクの日

日本自動車工業会（自工会）と日本二輪車協会（ＮＭＣＡ）は今日、バイクの安全意識向上を呼びかけるとともに、楽しさを伝えるイベント『バイクの日』スマイル・オン２０１１」を新宿駅（東京都新宿区）東口のアルタ前広場で共同開催する。

勝間和代氏（アナリスト）や伊藤真一氏（レーシングライダー）を招き「バイクの楽しさ、有用性」をテーマにしたパネルディスカッションを行う。また全国オートバイ協同組合連合会（ＡＪ）が行った震災被災地でのボランティア活動を紹介する。

昨年は日比谷公園（東京都千代田区）で行ったが、今年は若者でもにぎわう新宿駅前に場所を移し、多くの人にイベントへの参加を呼びかける。

スズキが開いた安全講習会

震災で二輪車に脚光

震災後、被災地で二輪車の需要が増えている。自工会によると東北6県を合わせた4－5月の二輪車販売は原付き一種（排気量50cc以下）は前年同期比1・9倍、原付き二種（同51cc－125cc）は同2・1倍、軽二輪（同126cc－250cc）は同1・3倍となった。

震災直後はガソリン不足の中で、二輪車の燃費性能に注目が集まったほか、がれきをすり抜ける機動力も評価を得た。現状でも、公共交通機関が完全には元に戻らない中で、特に宮城県や岩手県沿岸地域で通学や通勤を目的とした需要が増えているという。

冬に向けて被災地の需要は落ち着くとの見方もあるが、緊急用に一家に1台備えるといった動きもあるという。生活の足、緊急の足として二輪車の価値が改めて見直されている。

駐車場不足対策進む

被災地で見直される二輪車だが、国内販売市場は長い低迷から抜け出せないでいる。年間販売台数は82年の327万台をピークに減少し、10年は38万台まで下がった。少子高齢化や公共交通機関の発達などの環境変化に加え、直接的にはヘルメット着用義務化、排ガス規制などが要因だ。

さらに近年では06年の違法駐車取り締まり強化が追い打ちをかけた。自工会が09年に行ったアンケートでも二輪車の使用に関して気になる点として、「外出先での駐車に困る」という回答が17％にのぼった。

もちろん違法駐車は罰せられるべきだが、「特に都市部では駐車場が絶対的に不足しており、対応に苦慮するライダーも多い」（自工会）というのが実情だ。

こうした駐車場問題を解決しようと官民が取り組みを積極化している。自治体は二輪車駐車場を徐々に増やしており、駐車違反は07年の約50万件から10年には約25万件に減った。

またＮＭＣＡは、携帯電話で閲覧できる駐車場検索サイトの運営を5月に始めた。携帯の全地球測位システム（ＧＰＳ）機能を使って、周辺の駐車場を地図上に表示するのが特徴。外出先で手軽に駐車場を探したいというライダーのニーズに応えた。

また駐車場をつくってほしい場所をリクエストできる機能も用意。事業者がライダーの協力を得て、効率的に駐車場を整備していける仕組みを整えた。

ファン獲得へ取り組み続々

国内販売を盛り上げるため二輪車メーカーは、あの手この手でリピーター獲得やファンのすそ野拡大に取り組んでいる。

ホンダは7月上旬、軽井沢で大型二輪車「ＣＢ１１００」のファンイベントを開いた。プロカメラマンによる撮影サービスや、開発者によるトークイベントを実施。ＣＢ１１００のオーナー約130人が集まり、会場は盛り上がりをみせた。オーナーと直接やりとりする機会を設け、ファンとの関係を強化するのがホンダの狙い。秋には関西で同様のイベントを開く予定。

ライダーのすそ野拡大

商品ラインアップを広げ、ライダーのすそ野拡大に取り組むのは川崎重工業。08年4月に発売したスポーツバイク「Ｎｉｎｊａ２５０Ｒ」は、誰もが楽しめるというのが開発コンセプト。初心者や女性にも親しみやすいように軽量・コンパクト化を実現。その一方で、スポーツバイクとしての質感を高め、大型バイク利用者のセカンドバイクとしても満足を得られるようにした。

またタイで生産し日本に逆輸入することで、価格をスポーツバイクとしては割安の53万3000円（現行モデル）に抑えた。ホンダもタイ生産で低価格化を図った新型スポーツバイク「ＣＢＲ２５０Ｒ」を3月に国内で発売し、市場を盛り上げる。

一方、二輪車が敬遠される理由として根強いのは安全性への懸念。そこで二輪車メーカーは、事故を減らしイメージアップにもつなげるため安全講習会を各地で開いている。例えばスズキは、自社のテストコースである竜洋コース（静岡県磐田市）を使用し「セーフティスクール」を年4回実施している。基本動作から危険予測、高速道路走行までさまざまメニューがあり、楽しみながら訓練できる。

また同社は車輪ロック装置（ＡＢＳ）付き二輪車の体験試乗会も主催。安定したブレーキ性能を引き出す機能を体験してもらい、ＡＢＳの普及を図ることで事故抑制や被害軽減につなげたい考えだ。

自治体注目電動バイク

環境性能に優れる二輪車だが、さらなるエコを実現するのが排出ガスゼロで走る電動バイクだ。大手メーカーではヤマハ発動機が「ＥＣ－０３」を10年9月に発売、ホンダは「ＥＶ－ｎｅｏ」のリース販売を同12月に始めた。ヤマハ発のＥＣ－０３は、排出ガスゼロのほかに、静粛性が高く滑らかな走りも特徴。1回の充電当たりの走行距離は43キロメートルで、都市部での近距離移動ニーズを狙っている。

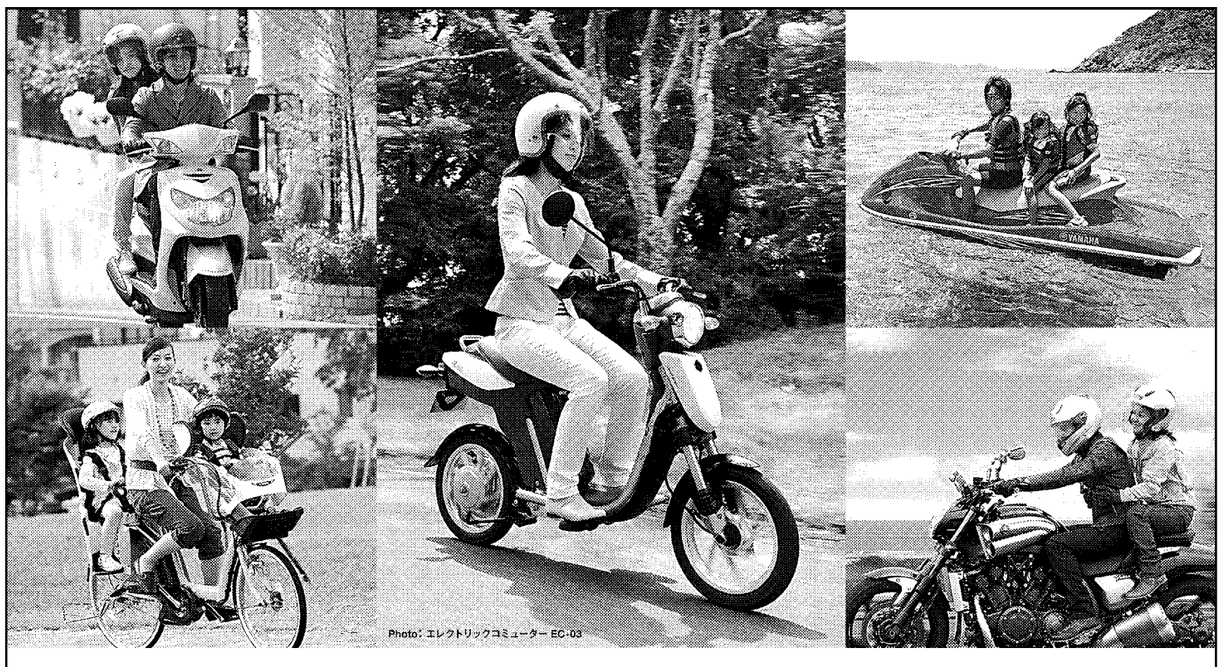
電動バイクは二酸化炭素（CO_2）削減を目的に自治体などから注目を集めている。ヤマハ発は神奈川県が進める「かながわＥＶバイク普及推進プロジェクト」に参画。その一環として今月8日から平塚駅（神奈川県平塚市）前の駐輪場に充電設備を設置し、試験運用を始めた。都市部での電動バイクの有効利用法やビジネスモデルのあり方などを検証する。

二輪車は走行性能はもちろん、環境対応や安全性などさまざまな側面で進化を続けている。電動バイクはその象徴として、技術革新の先頭を走っていく。

ヤマハ発動機の電動バイク「ＥＣ－03」

サーキット・トイラン in SUGO　28日、宮城で開催

「サーキット・トイラン in SUGO」が今月28日（日）に宮城県村田町のスポーツランドＳＵＧＯで開催される。主催はサーキット・トイラン事務局。全日本ロードレース第5戦ＳＵＧＯスーパーバイクレースに東日本大震災で被災した子供たちを招待し、レース観戦のほか、バイクや選手と触れ合い、夏休みの楽しいひとときを体感してもらうことを目的とする。また、被災した子供たちを応援すべく、開催当日、子供たちへのプレゼントもしくは寄付金を持参した上でバイクでの来場を呼びかけている。

当日のイベント内容は①決勝スタート前に子供たちとトイラン参加のライダーが手をつないでグリッドを見学することを可能にする「グリッドウォーク」②レース後、選手が子供たちとタンデムで1ラップしたり、バイクにまたがらせたりするなどの機会を設ける「サーキットトラン」③トイラン参加ライダーと一緒に観客席での応援観戦―などである。

開催時間は11時からだが、受付時間は9時－17時。受付場所はスポーツランドＳＵＧＯの正面ゲート前受付テント。参加条件は黄色いスカーフやハンカチなどをオートバイのバックミラーに結んで、被災した子供たちへのプレゼントや寄付金を持参すること。事前の申し込みは不要。